



Seigen Ono, A Rootless Cosmopolitan &gt;&gt;&gt;

## セイゲン・オノ・インタビュー

作曲家、プロデューサー、エンジニアとしてワールドワイドに活躍する  
コスモポリタン、セイゲン・オノが語るニューヨーク交友録。

構成／編集部

アート・リンゼイとジョン・ゾーンが初めて日本に来たのが、近藤等則さんが呼んだ84年ぐらいだったかな。そのころ僕はまだ英語がしゃべれなくて彼らもまだ日本語が全然しゃべれなかった。そんなにみんな売れてない時代で、日本国内とかヨーロッパ・ツアーと一緒にやってね。それが初めてのきっかけで、みんな若かったしすぐに友だちになって、お互い東京とNYを行ったり来たりするようになったんだ。それで85年にラウンジ・リザーズが来日したときにライブ・レコーディングをやりたいってことで、誰かいいエンジニアはいないのかってジョン・ルーリーが探して、なかなか見つからなかったみたいで僕のところに話が回ってきて。ジョンもメチャメチャがままなヤツなんだけど、僕もそうだから「こうじゃなきゃイヤだ」ってはっきりものを言ったら、それが結果的に良かったってうか、ジョン・ルーリーたちに気に入ってもらえたみたいで。そのころのラウン

ジ・リザーズのメンバーがエヴァン・ルーリー、マーク・リポー、ダグ（ダグラス）・ボーン、ロイ・ナサンソンと、いまとなってはキーとなる人間がみんないてベスト・メンバーだった。そこからNYの輪がすごい広がってきて、ビル・ラズウェルなんかとも仕事するようになってきたから、僕にとって大事な、というか結果的にそういうグループに入って行くことになって。だから出歩くところもそのころのニッティング・ファクトリーとかで。あのころはみんなそんなにレコードなんか出してなかったんだだけね。当時はいろんなレコーディングの仕事をして、ロサンゼルスとかからも声がかかったりしてただけど行かなかったんですよ。なんか口ッって人生の問題がないような気がして。絶対、僕はイースト・コーストの人間なんです。ウエスト・コーストはハートとか感情に訴えてくるものがないと思って。ヨーロッパとブラジルとかのラテンの中間にあるのがNYで、

## 10年やれば、10枚出せば何か形になってくるっていうのを実現できる街なんですよね。

いろんなものが混ざって何か生まれてくる場所だと思う。そうして新しく生まれてきたものを商業としてディヴェロップメントするのがウエスト・コーストであって。10人聴いて9人がいいってものは商業としては重要かもしれないけど、10人聴いて1人がいいって言うのが大事なこと、それが本当の音楽だと思う。〈音楽〉とただの〈娯楽〉は違うもので、NYって街はまさに前者のような場所。たとえばウエイターやってるヤツなんかに訊いてみると、ほとんどがアーティストだったりする。そういうハングリー精神とか真剣さとかはアートやジョン、それに街を歩いている人たちから学んだ。10年やれば、10枚出せば何か形になってくるっていうのを実現できる街なんです。ただしくまでもNYって街は仕事をする場所ですね。東京も同じだと思うけれど。

マンハッタンは、行くたびに違うアパートに住んでて地元みたいな感じがするから、東京より詳しい目をつぶってでも歩けるぐらい。そのころはニッティング・ファクトリーに通って、そこでミュージシャンを見つけてレコーディングに誘ったりしてね。ドン・バイロンとかもそのうちのひとり。でも最近は大きくなっちゃって、前の小さな感じのときの方がおもしろかったな。景気が好調っていうこととか、治安が良くなったっていうこともあって、NYは街全体がマイルドになりすぎた感じがする。

モントルーに呼ばれたのは、オタクなディレクターがいてその人が僕のテープを聴いて気に入ってくれたらしくて。そういうのもアートやジョン、ラウンジ・リザーズやそのマネージャーという、音楽に対して貪欲な人たちを通してだったと思うんだけど。それでニッティング・ファクトリーに出ると同じ感覚でヨーロッパに行ったらすごく反響があった。本当は2年続けて出演っていうのは許されないんだけど、特例でね。そこでライブ・レコーディングをしてから、ヨーロッパのいろんな国のフェスティバルからも声がかかるようになって毎年ライブで出かけるようになった。

カエターノ（・ヴェローゾ）はまず声に惹かれて、「この言葉は何だ？」っていうのがブラジルに行くきっかけになって。それで共通の知り合い

を通じて知り合って、僕のテープ（「Bar Del Mattatoio」）がそこからカエターノに渡ったみたい。それで彼が「すごい」って気に入ってくれて。だから「じゃあライナー書いて」って言ったらふたつ返事でOK。それから1年後ぐらいによくアルバムが完成して、彼とジルベルト・ジルが「トロピカルリア2」のツアーでヨーロッパに来ていたときにたまたま僕もヨーロッパにいて、そこでまたライナーのお願いをしたら次の週にファックスが送られてきた。で、アートの「メシおごるからポルトガル語の翻訳やってくれ」（笑）って頼んで。カエターノも原稿料タダだった（笑）。ジルは僕のCD全部持ってくれてるらしい。でもカエターノに比べてジルは文章の才能はあんまりないから、セッションでは共演したいなって思ってるんだけど（笑）。



でも、こうしてお話を訊いてると、ただアートやジョンといった重要なミュージシャンと知り合いだっただけじゃなくて、本当にコスモポリタンのような、日本ではなかなかセイゲンさんという存在の人っていませんよね。ミュージシャンとエンジニアを両方やってるような人も。

ミュージシャンとエンジニアというの分けて考えちゃダメだと思う。どちらも音楽活動なのだから。でもアートやジョンも

いまではく重要なミュージシャン）って言われるところがすごいよね。あのころは、「なんだ、あのわけのわからないノイズをやってるヤツらは？」（笑）だったからね。僕も一応、一方でGLAYとかPUFFYとかやってるんですよ。そこで実力をいかに発揮してるんですけど（笑）。 ■

協力／渡辺 亨



セイゲン・オノの作品を紹介。上から、88~94年に東京、NY、リオデジャネイロ、サンパウロ、ミラノで録音された「Bar Del Mattatoio」、93、94年と2年連続スイスのモントルー・ジャズ・フェスティバルに（セイゲン・オノ・アンサンブル）として出演したときの模様を収めた「Montreux 93/94」、フランスでのミュージカル「Dora」、そしてヨーロッパ各国のフェスティバルに出演したときの模様などを収録した3枚組の大作「La Movida」（以上サイデラ）、89年にコム・デギャルソンのショウのために書き下ろされリリースされたアルバムをリマスターリングし、アート・リンゼイとの共同リミックスを加えた「Comme des Garçons」（エピック）、97年3月からほぼ毎月1,000枚限定でリリースされている（SD-2000）シリーズの第7弾「Saidera Paradiso」（西寺権太）（サイデラ）